

資料 帯3

令和3年度 北海道CLASSプロジェクト実施報告書（1年次）

学校名	北海道帯広三条高等学校
作成日	令和4年3月18日

1 今年度の検証について

①	検証の項目	授業評価における「『主体的・対話的』な授業をしている」率		
	検証の方法	授業評価アンケートによる昨年度との比較		
	検証結果	授業評価アンケート「主体的な学び・対話的な学び・深い学びができるような工夫がなされているか」結果から、昨年度よりも工夫がなされていると評価できる。		
		令和2年度	令和3年度	増減
	1年次	88.5	90.1	+1.6
	2年次	83.7	91.2	+7.5
	3年次	87.8	91.0	+3.2

②	検証の項目	外部人材活用授業数と教員の意識
	検証の方法	教員アンケート
	検証結果	教員アンケートは実施できなかったが、外部人材活用の取組数が昨年度1に対し、今年度は12となり大幅に増加した。

③	検証の項目	生徒の意識変容
	検証の方法	授業振り返りシート
	検証結果	

2 今年度（令和3年度）の取組

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4	市役所と連携し地域課題探究（3年「自己表現」）	
5		
6	帯広美術館と連携し美術館と対話型鑑賞（3年「自己表現」）	
7	帯広大谷短大と連携しビブリオバトル（3年「自己表現」）	
8	2年次英語交流活動開始（2年「探究」）	
9	第1回コンソーシアム会議	
	帯広市役所都市政策課講話（2年「現代社会」）	

資料 帯3

10	2年次英語交流活動（2年「探究」） 中学生向け学校説明会企画運営（3年「自己表現」）	
11		
12	地域課題探究発表会（3年「自己表現」）	
1		
2	第2回コンソーシアム会議	
3		

3 組織化に関する検証【推進校のみ】

(1) コーディネーター選出の方針【教育局記入】

・帯広市内で地域活動している一般社団法人とかち子育て支援センターを運営し、これまで子育てする保護者をはじめ、子どもから高齢者、障がい者など地域住民が抱える課題を解決できる環境をつくるなど、これまでの経験と幅広い人脈を活かして地域活動を実践している方を選出した。

(2) コーディネーター選出の方法【教育局記入】

・道教委事業「家庭教育支援者の養成とネットワーク化推進事業」において、コーディネーターが所属する団体と連携し事業展開する過程で、教育局が本人にアプローチした。その後、学校訪問を行い、校長が事業のねらいを説明し依頼した。

(3) コーディネーターとの連携

・職員室内に座席を確保し、情報交換しやすい環境を整えた。

(4) コンソーシアム設置に関わっての方針

・生徒の進学先を類型化し、その専門的な立場の人材を選出した。
・アカデミックな探究活動につなげることを念頭に上級学校から人材を選出した。

(5) コンソーシアム設置に関わっての方法

・学校側が求める人材希望をあげ、教育局の助言をいただき選出した。

(6) コンソーシアム会議における議題

4 組織化以外の成果等

・生徒が自身の成長を感じたり、地域への関心を持つことができた。
・地域コーディネーターにより、地域とのつながりができ始めた。
・教員の中に地域の人材を活用したいという意識が生まれた。
・一部から始まったつながりが、少しずつ広がっている。『自己表現』発表会には、多くの地域の方に参加いただいた。

資料 帯4

令和4年度 北海道CLASSプロジェクト実施計画書（2年次）

学校名	北海道帯広三条高等学校
作成日	令和4年6月10日

1 今年度の目標と取組計画

月	取組
2年次 (R4) 【予定】	(目標) ・1年次における学年全体での探究プログラム構築 ・2年次における類型別探究活動プログラム計画作成 ・コーディネーターとの連絡体制の構築 (主な取組) ・1年次における地域課題探究活動の実施 ・次年度2年次における類型別探究活動の計画 ・定期的な関係者打合せの実施 (検証の項目) ※定量及び定性 ・各探究活動による生徒の変容 ・教員の探究活動への意識 ・コーディネーターとの連絡体制

2 今年度の検証の項目と方法

検証の項目	検証の方法
各探究活動による生徒の変容	アンケート・振り返りシートコメント
教員の探究活動への意識	外部人材活用数と各取組の教員評価
コーディネーターとの連絡体制	コーディネーターへの聞き取り調査

3 今年度（令和4年度）の取組

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4	関係者打合せ	・帯広市役所との協働による『帯広市のまちづくり』対話（3年次「自己表現」）（5月）
5		
6	関係者打合せ	・中学生向け学校説明会企画運営（3年次「自己表現」）（8月）
7		
8	関係者打合せ	・美術館との協働による対話型鑑賞（3年次「自己表現」）（9月）
9	第1回コンソーシアム会議	
10		・イングリッシュスピーカーとの交流活動（2年次「総探」）（11月）
11	関係者打合せ	
12		・小中学校教育体験（2年次）（11月）
1	関係者打合せ	
2	第2回コンソーシアム会議	・3年次「自己表現」探究発表会（12月） ・1年次「地域探究」最終発表会（2月）
3	関係者打合せ	

資料 帯 4

4 小・中学校との連携を強める取組

- ・中学生向け学校説明会を本校生徒が企画運営
- ・近隣小中学校での教育体験を実施

5 その他特記すべき事項

- ・十勝デュアルシステムと連動した高大連携事業の実施

資料 帯5

令和4年度 北海道CLASSプロジェクト実施成果報告書（2年次）

学校名	北海道帯広三条高等学校
作成日	令和5年3月20日

1 今年度の検証について

①	検証の項目	各探究活動による生徒の変容
	検証の方法	アンケート・振り返りシートコメント
	検証結果	<ul style="list-style-type: none"> ・探究活動に概ね肯定的な意見が多い。 ・進路を考える上でもよい機会と捉えている。（資料1参照）

②	検証の項目	教員の探究活動への意識
	検証の方法	外部人材活用数と各取組の教員評価
	検証結果	<p>(1) 外部人材活用数 のべ 117 名（資料2参照）</p> <p>(2) 教員評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域探究は生徒の地域に対する関心を向上させたことにより、教員は生徒を学校外に出していこうという意識が芽生えた。 ・探究の学びを進めることについて、依然として難しいとする教員が 1/3 ほどいるが、探究の過程について生徒の理解につながったと答えており、その成果は実感できたものと思われる。 ・地域人材が入ることで探究が進んだと答えた教員がほとんどであり、外部人材の活用に抵抗感は低くなった。

③	検証の項目	コーディネーターとの連絡体制
	検証の方法	コーディネーターへの聞き取り調査
	検証結果	<ul style="list-style-type: none"> ・学校のスケジュールが読めないことが多く、その間に自分の予定が入ってきてしまい、動きがとれない状況になったため、担当者と定期的な情報共有が必要であった。 ・外部人材を必要とする教諭とは、直接打合せしたほうが効率的に調整できた。 ・外部人材と打合せする際には、三条高校のコーディネーターとしての立場を証明する名刺があれば交渉しやすかった。

2 当事者の声について

生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・武内ゼミ（帯広・十勝における福祉の課題）で活動した私は、自ら課題を見付け、解決に向けて行動する重要さを改めて学んだ。子どもの居場所が少ないことを課題とし、解決策を子ども食堂の普及と考えた私は、実際に子ども食堂にボランティアとして関わることをとおして、自分の抱いていた子ども食堂のイメージと違い、明るい雰囲気であった。子ども食堂への
----	--

資料 帯5

	<p>偏見がなくなり、よりはっきりした解決策を提示することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・橋本ゼミ（十勝のスポーツを探究しよう）の活動を通して、自分の身近なところにも様々な課題というものがあることに気付いた。それらの課題に対する解決策やアイデアは、様々な人との交流や意見交換を通して自分が思いもつかないような解決方法が提案されたことから、他の人と協力して探究する意味がわかった。 ・山崎ゼミ（生産者・飲食店・観光客の「三方よし」を考える）で、前期に学んだ探究のサイクルを実際に回すことで、物事を深く考える力、批判的に考える力が身に付いた。さらに、ほかのクラスの人達と話し合うことで、以前のクラス間コミュニケーションとは違った深い人間関係ができた。違うテーマでも探究活動をしたいと思った。
<p>教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでは生徒に地域の諸課題を提示しても、それを客観的に評価するのに留まることが多かったが、地域探究の取組によって当事者意識が強まり、自ら進んで地域の諸課題の解決に関わっていこうとする姿勢が多くの子に見られるようになった。 ・地域人材による実社会での例や、高校生では気付くことができない費用対効果など現実的な視点の提示により、生徒の取り組む姿勢に変化が出てきた。コーディネーターによる地域人材の発掘に感謝しかない。生徒は教員以外の大人との接点が少ない。自分たちのテーマについて、教員以外の大人の取組などを知り、指導を受けられたことはよかった。 ・（地域人材が入ることについて）より専門的な話を聞けることで、現在の状況や課題が整理されて理解できるので、生徒にとってはよい刺激になっている。
<p>地域の方</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に地域の大人と関わり、探究活動を行い発表する探究活動は、本当に素晴らしい取り組みだと感じた。高校1年生でこれほどこれほどのレベルの発表ができることに驚いた。生徒達の素直さ、真面目さ、探究する姿は大人である私たちも見習わなければいけないと感じた。 ・生徒たちが感じていること、その眼差しが、私たち地域の大人に素晴らしいインスピレーションを与えてくれた。今回の探究で深めた問いを高校生活の中で更に発展させ、卒業後の進路やその後の人生に繋げてほしい。 ・生徒たちが学校やパソコンから離れて、実際の現場(店)での活動は貴重な体験である。「探究活動」にかかわらず、生徒自身が動いて感じる機会を大事にしてほしい。

資料 帯5

3 今年度（令和4年度）の取組について

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4	関係者打合せ	<ul style="list-style-type: none"> ・帯広市役所との協働による『帯広市のまちづくり』対話 （3年次「自己表現」）（5月） ・中学生向け学校説明会企画運営 （3年次「自己表現」）（8月） ・美術館との協働による対話型鑑賞 （3年次「自己表現」）（9月） ・イングリッシュスピーカーとの交流活動（2年次「総探」）（11月） ・小中学校教育体験（2年次）（11月） ・3年次「自己表現」探究発表会（12月） ・1年次「地域探究」最終発表会（2月）
5	担当者打合せ	
6		
7		
8		
9	第1回コンソーシアム会議	
10	担当者打合せ	
11	担当者打合せ	
12	担当者打合せ 北海道 CLASS プロジェクト道東圏研究指定校「探究学習交流会兼連絡会議」	
1	担当者打合せ	
2		
3	第2回コンソーシアム会議	

4 小・中学校との連携を強める取組について

- ・中学生向け学校説明会を本校生徒が企画運営した。
- ・近隣小中学校での教育体験（十勝教育局主催）に参加した。

5 学校独自の取組・工夫・実践について

(1) 組織化に関する取組・工夫・実践（校内体制含む）

- ・令和3年度から探究推進部を設置した。
- ・探究プログラムに関する校内研修会を実施した。来年度の内容について広く意見を募った。

(2) 地域コーディネーターとの連携に関する取組・工夫・実践

- ・職員室内にコーディネーター席を確保した。
- ・年度初めに探究推進部の定例会議にコーディネーターも出席し情報共有を図った。

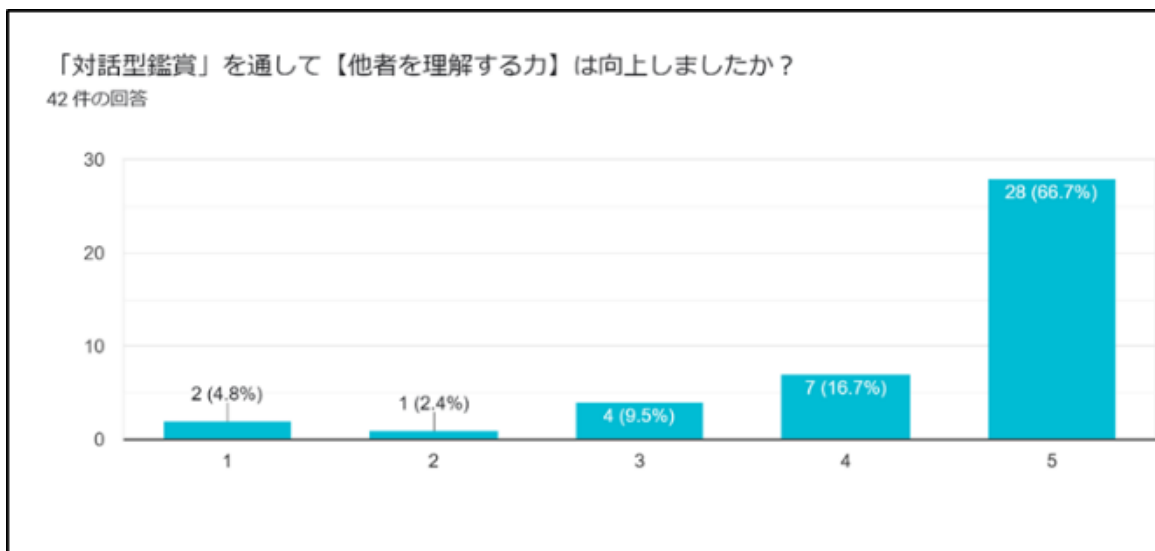
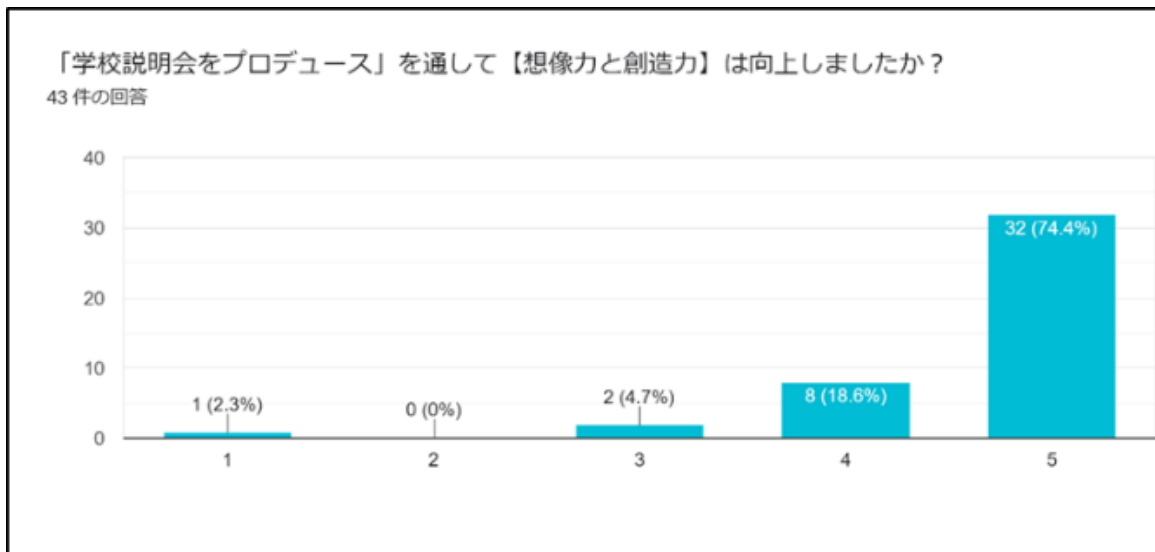
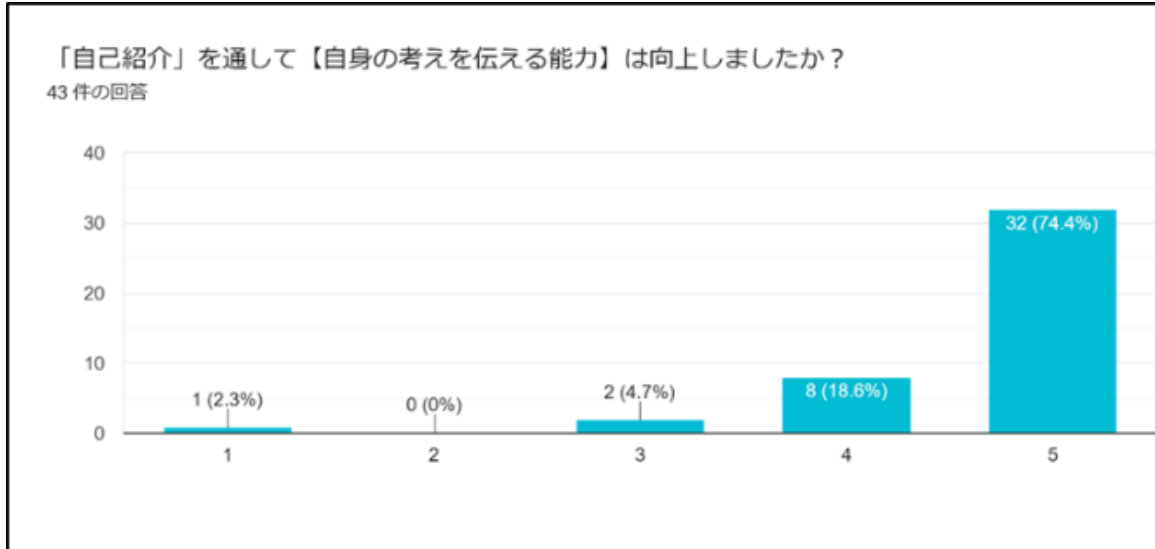
(3) その他

- ・昨年度の探究活動での発表をコーディネーターが地域企業に紹介し、企業と生徒の間を繋ぐことで、当該生徒がイベントを企業と協働して企画し、多数の生徒がボランティアとして参加した。
- ・1年次探究の商品開発ゼミで地元企業と連携して、おからハンバーグを商品化し、地元スーパーの販売会に参加した。
- ・他のゼミにおいても地域行事ボランティアに参加したり、福祉ゼミでは子ども食堂に参加したりするなど地域活動に自発的に参加する生徒が多くいた。

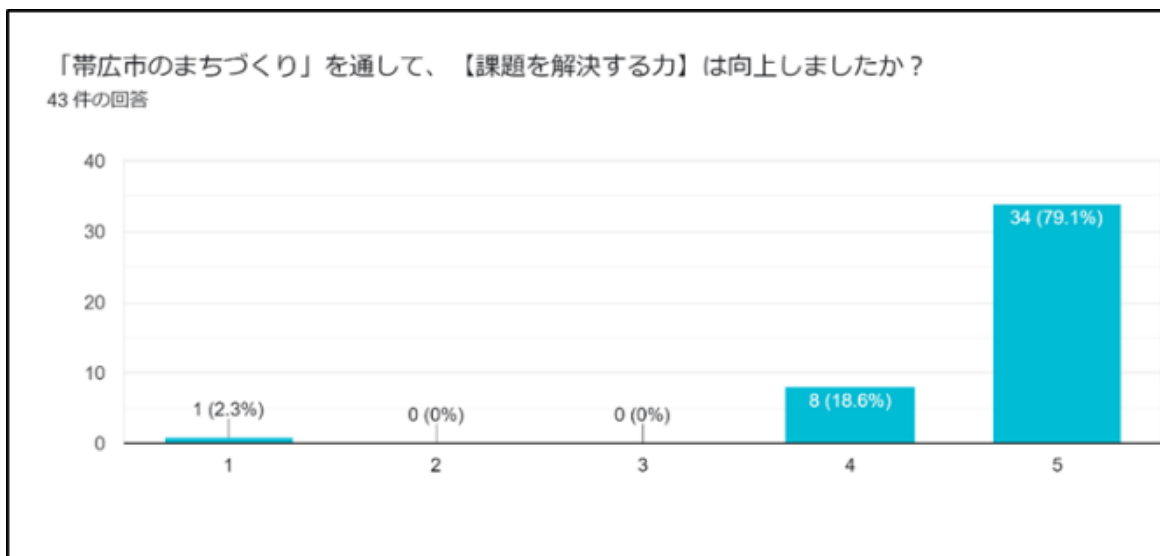
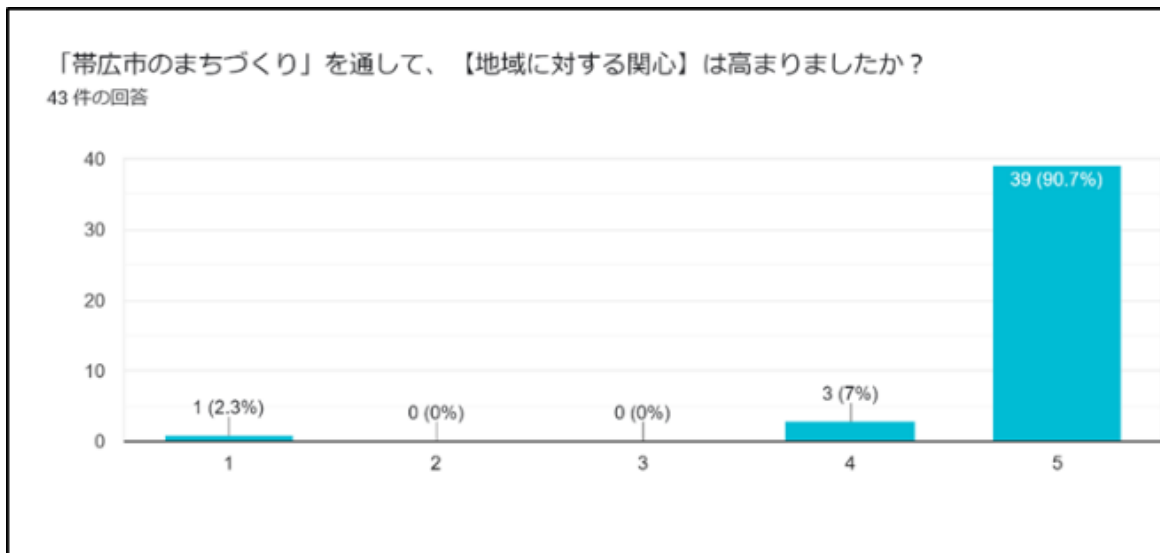
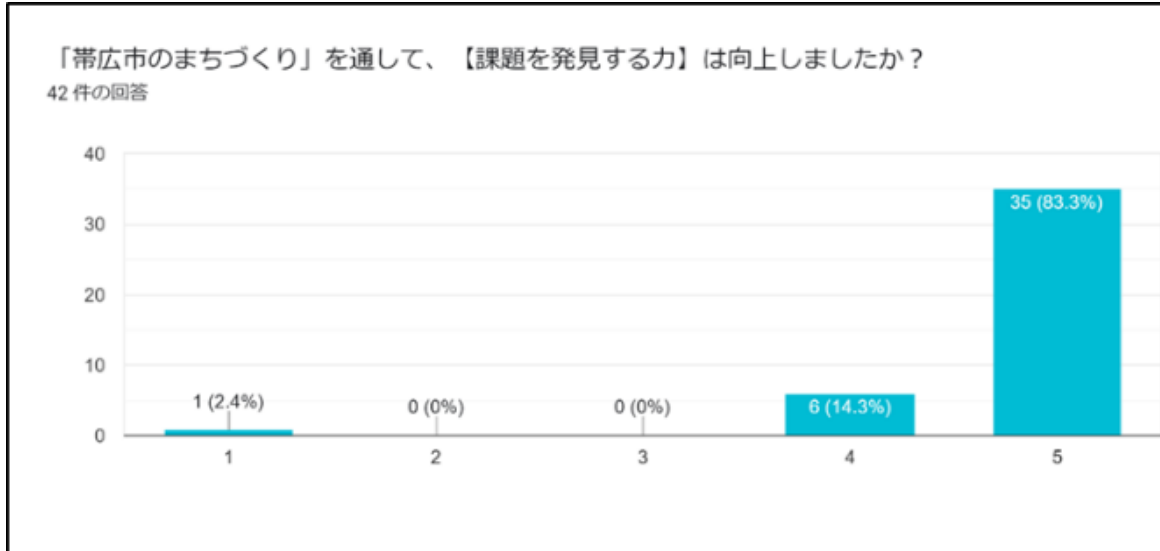
資料 帯5

【資料1】 各探究活動による生徒の変容

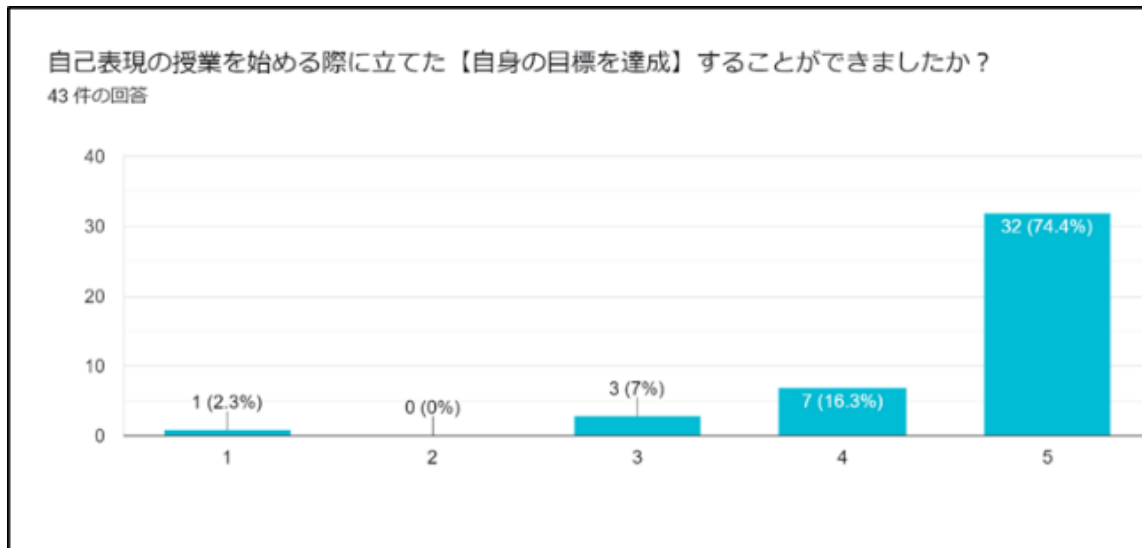
1 3年次選択科目『自己表現』振り返りアンケート結果（5段階評価、5が最高）



資料 帯5



資料 帯5



【生徒コメント】

- ・将来社会に出て生きていく上で大切な自己理解ができた。
- ・自己表現の授業をとおして、表現力・想像力・創造力を高め、自分からたくさん発表・コミュニケーションができるようになった。
- ・考えの幅を広げることができ、自分の思いや考えを言葉や文章で表すことができたから。さらに、いろいろな人との交流を通して、他の人を解ろうとすることができた。
- ・自分の意見をしっかりと相手に伝えながらも相手の意見をしっかりと聞いて受け入れることができた。

2 1年次探究活動振り返りシートコメント

- ・スライドを分かりやすく作る方法や、何かを調べる時に順序を立てて、効率的に調査できるようになった。
- ・様々な視点から物事を捉える力が身に付き、また、その能力で設定した課題を解決できるようになったと思う。
- ・グループのメンバーと考えを共有していくことの難しさを感じた。発表をする上でどのようにすれば説得力がつくかを他のグループの発表をとおして学べた。
- ・自分たちが立てた課題に対し、自ら情報を集め、課題解決をするという探究のサイクルを感じることができた。
- ・パソコンで調べることも大事だが、自分からどこかに向いて話を聞いたりすることも大事だということ学んだ。
- ・身体障害者の現状や課題を調べて自分たちにできる活動を考えました。実際にアイマスクをした状態で図書室を歩いて大変さを知ることができたとし、補助する方も大変だと思いました。身体障害者の方以外にも、ヤングケアラーや高齢者、子どもなど日常の生活で困っている方の気持ちを考えられて、役に立てるような人になりたいと思います。私は将来医療系の仕事で臨床検査技師が気になっているので、これからも医療や福祉のことについて知っていきたいなと思いました。

資料 帯5

【資料2】 外部人材活用について

ゼミテーマ	企業・団体名	ゼミテーマ	企業・団体名
よりよい街づくり	帯広市役所	十勝の食と農業	you tuber
	株式会社そら		シンガーソングライター
生産者・飲食店・観光客の「三方よし」を考える	株式会社クナウパブリッシング	帯広・十勝における福祉の課題	帯広市役所地域福祉課
地域×高校生=???	十勝イベント協会		Otete to Otete
	浦幌町地域おこし協力隊		学童保育所
帯広の光を観る・十勝のスポーツを探究しよう	とかち財団		相談支援事業所 向日葵
帯広の光を観る・子どもたちに十勝の魅力と夢を伝えよう	ホテルヌブカ	商品開発	帯広市役所経済企画課
帯広の光を観る	ドット道東		帯広物産協会
	NHK		中田食品
	日本旅行		T Pパック
	キャンドル		ハピオ
	帯広市役所	満寿屋	
十勝のスポーツを探究しよう	帯広市役所スポーツ課	子どもたちに十勝の魅力と夢を伝えよう	司会業
十勝の自然について考える	ベアマウンテン		カウンセラー
	石塚建設		ライター
世界とつながる十勝	JICA職員	地域における高校の役割	天売高校教諭

28団体、のべ人数にして 117名 の方に協力していただいた

資料 帯6

令和5年度 北海道CLASSプロジェクト実施計画書（3年次）

学校名	北海道帯広三条高等学校
作成日	令和5年4月24日

1 今年度の目標と取組計画

月	取組
3年次 (R5)	(目標) ・地域の資源を活用するなど関係機関との連携 ・知識を日常生活に関連付けながら、様々な分野を横断的に統合させる学習の充実 ・地域や産業界に求められる地域の未来を創る人材の育成 ・自己決定の場を与え、自己の可能性の開発 ・大人と子供が協働した取組を支える体制の構築 (主な取組予定) ・進路類型別探究活動 ・公開授業の実施 ・連携校・サポート校との意見交換会 ・校外活動のシステム設計 ・探究発表会の地域住民参加 ・コーディネーターとの定期的な情報交換の場設定

2 今年度の検証の項目と方法

検証の項目	検証の方法
Collaboration ・地域の資源を活用するなど関係機関との連携	・探究活動別地域人材活用団体数並びに協力人数
Literacy ・知識を日常生活に関連付けながら、様々な分野を横断的に統合させる学習の充実	・教師の変容や生徒の変容が見えるアンケート
Adult ・地域や産業界に求められる地域の未来を創る人材の育成	・授業以外での活動事例 ・外部人材と協働した成果及び成果物
Student ・三条高校が育成を目指す「4つの資質・能力」 ・自己決定の場を与え、自己の可能性の開発	・評価指標の作成とそれによる外部評価 ・各ゼミにおける個々の課題設定 ・多様な人材との協議内容
System ・大人と子供が協働した取組を支える体制の構築	・活用人材リスト ・生徒の校外活動のシステム設計 ・「CLASS」5つの取組に関する協議の実施

資料 帯6

3 今年度（令和5年度）の取組

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4	関係者打合せ	<ul style="list-style-type: none"> ・帯広市役所との協働による『帯広市のまちづくり』対話（3年次「自己表現」）（5月） ・2年次「類型別探究」（6～12月） ・中学生向け学校説明会企画運営（3年次「自己表現」）（8月） ・美術館との協働による対話型鑑賞（3年次「自己表現」）（9月） ・小中学校教育体験（2年次）（11月） ・1・2年次探究発表会（12月） ・3年次「自己表現」探究発表会（12月）
5		
6	関係者打合せ	
7		
8	関係者打合せ	
9	第1回コンソーシアム会議	
10		
11	関係者打合せ	
12	北海道 CLASS プロジェクト道東圏研究指定校「探究学習交流会兼連絡会議」	
1	関係者打合せ	
2	第2回コンソーシアム会議	
3	関係者打合せ	

4 自走可能な体制整備に向けた方策

- ・団体会計から探究活動費配分
- ・コーディネーター業務の精選と次年度以降の体制構築
- ・コンソーシアムメンバーによるコーディネート機能

5 圏域の研究指定校等、他校との連携・交流について

- ・連携校・サポート校との意見交換会

6 学校独自の取組・工夫

- ・職員室内にコーディネーター席設置
- ・コーディネーターの担当分掌会議参加

7 その他特記すべき事項